ミラノ通信 32号　ミラノサローネ・スペシャル

発行日　2023年10月3日
発行者 富山・ミラノデザイン交流倶楽部
高岡市オフィスパーク 5
公益社団法人富山県デザイン協会内
TEL. 0766-63-7140

執筆　池田美雪
ミラノ在住デザイナー

4月18日から23日まで6日間、ロー・フィエラミラノにて、第61回ミラノサローネ国際家具見本市（以下、ミラノサローネ）が開催されました。

今年は、やっと通常通りの4月開催となり、総面積16万9281平米の展示空間へ、ミラノサローネ国際家具見本市、サローネ国際インテリア小物見本市、サローネサテリテに加え、Euroluce（サローネ国際照明見本市）、そしてコントラクトを対象としたインテリアのためのデザイン製品、装飾的・技術的ソリューションを紹介するS.Project、未来のワークスペースのためのデザインとテクノロジーを探求するWorkplace3.0が開催されました。今年採用された新しいアイデアとして、これまで上下二階で構成されていた展示フロアが、導線を考慮した地上階のみの『ワンフロア展示』となりました。さらに特別展として、Euroluceの4つのホール内で「The City of Lights（光の街）」という大きな括りの中で、Beppe Finessiのキュレーションによる6つの展覧会とインスタレーションが併催され、ホール内のレイアウトを『都市型』へ大きく変換することで、見せる側にも見る側にもシンプルかつ有機的な新しい体験を提供する場になりました。

COURTESY SALONE DEL MOBILE.MILANO 撮影 ANDREA MARIANI

2月15日、ミラノのTeatro Franco Parentiにて開催された記者発表会の様子。

COURTESY SALONE DEL MOBILE.MILANO 撮影 LUCA FIAMMENGHI

開催初日、イタリアのメローニ首相を迎えて行われたオープニング式典。

COURTESY SALONE DEL MOBILE.MILANO 撮影 ANDREA MARIANI

S.Project会場内で新製品を発表するカリモク家具の展示ブース。

来場者数は、181カ国から307,418人(内、国外から65%)、2022年に比べ15%増を記録し、出展については合計2000を超える展示の内34%がイタリア国外37カ国から参加、そのうちサローネサテリテ参加若手デザイナー550人は31カ国から、デザイン学校・大学28校は18カ国からの参加となりました。これらの数字から、この見本市がイタリア産業界だけでなく、世界レベルでデザイン製品の重要な舞台として捉えられていることが分かります。会場内を歩くと、世界中のさまざまな地域からやってきた来場者が空間を埋め尽くし、時空を超えた煌びやかな不思議な世界に迷い込んだような感覚を覚えます。オープニングのテープカットには、イタリアのジョルジア・メローニ首相も出席しました。

延々と続く出展ブースには、新しいテクノロジーや職人技、デザインを駆使した新作が明確なコンセプトと多彩な空間演出によって展示され、それぞれが独自のメッセージを発していました

が、そうしたデザイン製品の共演を支えている基本姿勢にこそ、実はこの見本市が開催される大きな意味が隠されています。

会場の模様を、こちらのビデオからご覧ください

ミラノサローネ - 見本市の新しいタクソノミーを目指す

タイトルにあるタクソノミーとは「環境面で持続可能な経済活動に該当するかを明確にするEU独自の分類基準」です。ミラノサローネは、見本市の宿命とも言える仮設空間に使用される膨大な建設資材のその後の問題について、極力廃棄を避け循環させていき、やむなく廃棄になるものについては効率的な処理を行えるよう、昨年、サステナビリティに関する基準が盛り込まれた一連のガイドラインを発表、配布しました。今年はさらにその方針を出展企業へも拡大し、人と地球への配慮を見本市の戦略の中心に据えたパートナー機関を選び、また、サステナビリティを戦略的な選択へさらに組み込んでいくことのコミットメントと重要性を証明するものとして、持続可能なビジネスのための世界最大のイニシアティブである国連グローバルコンパクトに、ミラノサローネとして昨年より参加したのです。その分かりやすい実例として、デザイン事務所Formafantasmaとのコラボレーションにより、見本市終了後にも他の場所で継続して使用できるモジュール構造の展示什器もデザインされています。こうして多角的にアプローチされた環境への配慮が認められ、業界初の見本市としてミラノサローネは持続可能なイベントマネジメントのための **ISO20121**認証の取得も達成しました。

COURTESY SALONE DEL MOBILE.MILANO 撮影 ANDREA MARIANI

Euroluce内に設置されたAUROREの空間でくつろぐ来場者たち。

COURTESY SALONE DEL MOBILE.MILANO 撮影 ANDREA MARIANI

特別展の一つ、写真家Hélène Binetの写真展では、自然光と建築、自然と時間の関係についての独創的なセレクションを紹介。

COURTESY SALONE DEL MOBILE.MILANO 撮影 DIEGO RAVIER

アーティストMaurizio Nannucciによるサイトスペシフィック・インスタレーション。

ミラノサローネのサステナビリティへの取り組みはこちらからご覧ください（英語版）

4つのパビリオンで構成される特別展を含むEuroluceの空間設計については、見本市のあり方を根本的に見直した、斬新な試みが行われました。プロジェクトを手がけたのは、ミラノを拠点に国際的に活躍の場を広げる建築事務所Lombardini22。プロジェクトは、70年代から80年代にかけてイギリスのUCL教授Bill Hillierが開発した、空間と社会の関係を分析するシステム「space syntax」理論を応用し、知覚を基に分析される人の流れを解釈し、何よりもまず人間を中心に据え、来場者にとってクオリティの高い空間レイアウトを作成することを目標に研究が進められました。その結果、従来のグリッド型のブース配置とは大きく異なり、来場者が隅々まで行き渡るように有機的で流動的な形が導き出されたのです。この空間の中心には「AURORE」と名付けられた照明インスタレーションにより内省的な空間に仕立てられた大きな広場とアリーナが設置され、連日、国際的に活躍するクリエーターや専門家を招き数々のトークやラウンドテーブルが開催され、Corraini出版社がキュレーションしたアートと文化を推進するブックショップも隣接され

ました。さらに、照明メーカーによるワークショップの開催や、サイトスペシフィック・　インスタレーションの制作なども併せ、さまざまな視点から光を考える場が創り出されました。

Euroluceの会場風景と特別展を、こちらとこちらのビデオからご覧ください。

ミラノサローネはイタリア家具業界を主軸に、これまで数えきれないほどの特別展・イベントを通じて、文化・芸術という普遍的な価値を推進してきましたが、さらに見本市の一つの模範例となるべく環境問題へ取り組み、多方面の有識者とともに未来への考察を行ない、新しいビジネスモデルや技術的ソリューションを模索していくための絶好の機会として、世界レベルでなくてはならない役割を果たしています。

こうした活動の中で、ミラノ市とのコラボレーションも年々緊密になっています。ご存知のように、ミラノサローネの開催期間は「デザインウィーク」として、街全体がデザインに包まれます。毎年、開催に先駆けて、より多くの人にメッセージを発信していくコミュニケーションキャンペーンですが、今年は、コミュニケーションデザインスタジオLeftloftと、ミラノのミレニアルアートシーンで著名なイラストレーターGio　Pastoriが手がけました。キャッチコピー「Do　you speak　design?」へ、アルファベットの1文字ごとにミラノのデザインシステムを発展させた作品たちを、原型やアイコンで表現したオブジェや家具を添えるアイデアです。普遍的な言語で表現された現代的で身近に感じられるAからZまでの26種類のポスターは、バス停留所、地下鉄構内、屋外ポスター、トラムのラッピング広告など多様な形で掲示され、ガッチリとイベントのムードを盛り上げていました。ホール22の前に設置されたスタジオからは、来場できない人たちも会場の雰囲気を味わい、デザインの世界に触れることのできるラジオ放送も連日発信され、参加者の裾野を広げました。

COURTESY SALONE DEL MOBILE.MILANO 撮影 ALESSANDRO RUSSOTTI

サローネサテリテ「Design：DOVE VAI?」

さて、毎年デザインの未来とそのフィールドの広さをライブで感じさせてくれるサローネサテリテですが、第24回目を迎える今年は「Design：DOVE　VAI?(WHERE　ARE　YOU GOING?)」の問いに答える、35歳以下の若手デザイナーと学生による興味深い作品が多く展示されました。

若い才能へ展示スペースとビジネスチャンスを与えるために、Marva　Griffinが1998年に設立しキュレーションを続ける中、今年は未来のデザイナーの育成とデザインの発展を支える18カ国のデザイン教育機関がクローズアップされました。建築家Ricardo Bello Diasの設計により、若手デザイナー550人の展示スペースを囲むように、デザイン学校・大学デザイン学科の28のブースが自然光の感じられる外周へぐるりと配置され、誰もが自然にアクセスできるような動線が描かれました。初日サローネサテリテ・アリーナでは、長年ニューヨークを拠点に活動してきたイタリア人彫刻家、デザイナー、建築家であるGaetano Pesceのトークイベント「Capire il futuro

COURTESY SALONE DEL MOBILE.MILANO 撮影 LUDOVICA MANGINI
太陽と月を空間モチーフに、Euroluceに隣接して開催されたサテリテ会場の様子。

COURTESY SALONE DEL MOBILE.MILANO 撮影 LUDOVICA MANGINI
トークイベントの終盤、若者たちの質問に答えるGaetano Pesce。

(未来を知る)」が開かれ、長いキャリアの中で制作してきた自身の作品について語りながら、若者たちに向けて「昨日までのデザインは機能に基づく形態、未来のデザインはそこに自分だけの表現と政治的、宗教的、あるいは自分自身の存在意義を表す『意味』を加えなくてはならない。常に好奇心を持って、新しいテクノロジーから生まれる素材を探求するべき。皆と同じであれ、というポリティカルシステムが存在するが、それと全く逆に自分自身を最大限表現することが、世界が今必要としていること。」と、力強いメッセージを投げかけました。

2日目に授賞式が行われたサローネサテリテアワードでは、プロダクトデザイナー5人が集まり結成した日本のデザイングループHONOKAの「Tatami Refab」プロジェクトが見事にグランプリを受賞しました。使い終えた畳や廃棄される原料を再生可能樹脂と混ぜ合わせ、大型3Dプリント技術により畳を現代の暮らしに編み直すプロジェクト。各作品に共通するコンセプトの素晴らしさと完成度の高さ、フォルムと素材の美しさ、伝統と最新技術の融合、どの点を取っても申し分ない受賞作品です。続いて、第二位を獲得したのは、香港のデザインスタジオStudio Ryteがデザインした「Triplex Stool」。超軽量なモジュールを組み合わせたスツールは、最も強度の高い天然セルロースの一つである亜麻繊維を使用しています。軽量性を備えたサステナブルな素材により、力強いブルータリズム（注*無骨な建築様式という意味が語源）へ現代的な再解釈を導入した点が評価されました。第三位は、ブリュッセルを拠点にテキスタイルの研究と制作を手掛けるデザインデュオAhokpe+Chatelinのハンモック「Kudoazò」。ベルギー人デザイナーEstelle Chatelinとベナン共和国出身の織物職人Georges Ahokpeが、ヨーロッパの住空間で使用されることを想定しデザインした作品は、アフリカのマーケットで流通している古着から得られる再利用繊維を活用し、ベナン共和国の伝統的な織物技術を活かして制作されました。穏やかで発色の良い色彩を組み合わせ、しっかりとした手触りで織られた長方形のピースを組み合わせて、ハンモックとしてデザインされています。

その他、個人的に興味をそそられたのは、ラトビア芸術アカデミーの学生31人の作品「WHAT'S ON/IN YOUR HEAD?」。情報に溢れ、世の中が急速な変化を続ける今の時代に、人々の頭の中にある考えをシンボリックに王冠という形を通して表現したインスタレーションです。もう一つ、中国から出展した「róng design library」も非常に興味深いプロジェクトです。このライブラリーは、2015年にセルビア人、

COURTESY SALONE DEL MOBILE.MILANO 撮影 LUDOVICA MANGINI

Griffin女史を囲んで、サテリテ・アワードの受賞者たちの記念撮影。

HONOKA-LAB.JP

サテリテ・アワード・グランプリを獲得したHONOKAの「Tatami Refab」プロジェクト。

サテリテ・アワード第三位を受賞したAhokpe + Chatelinの作品「Kudoazò」と作者。

ラトビア芸術アカデミーのブースでは、31人の学生が、現代人が考えていることを「王冠」で表現したインスタレーションを展示。

ドイツ人、中国人の3人で構成されるPINWU DESIGN STUDIOが、中国では初めてとなる、伝統工芸とその素材に焦点を当て創設した施設です。デザインスタジオは、中国の伝統工芸と素材をデザインに取り入れた「FUTURE TRADITION」をコンセプトに活動し、これまで数多くの国際的なデザイン賞を受賞しています。

サテリテの会場風景を、こちらのビデオからご覧ください。

Fuorisalone - アートのフル・イマージョン

今年も「ミラノデザインウィーク」の期間中（4月18日から23日）、900を超えるイベントがミラノ市街地で繰り広げられました。年々、各主催者がこのイベントへ注ぐ力が増してきているように感じられます。もちろん、イベントの良し悪しは、実際に体験してみなければ分からないのですが、底辺がレベルアップしていることは確かです。開催を控え、ときめくイベントに出会うために毎年考えるのが「限りある時間の中で、どのエリアをどのコースで見て回るか」ですが、リサーチの末、今年は思い切ってまずは、未踏の地へチャレンジすることに決めました。

今年で第5回目を迎えたALCOVA。毎年開催場所が変わるこのイベントは、これまでミラノに現存する歴史的なロケーションの中でも意外な場所を拠点にしてきました。今年は、15ヘクタールの広大な敷地を持つ元ミラノ市営ヴィットーリア門屠殺場が選ばれました。ミラノの中心部から東方向へ3km、外環状線沿いに位置します。1912年から1914年にかけて建てられ、ミラノ市の食糧管理施設として機能していましたが、90年代から徐々に屠殺部門が縮小され、2005年に完全に閉鎖された産業遺産です。敷地内には、今では廃墟となった昔の面影を残す建物がいくつかあり、それらの内部空間と中庭などの屋外も存分に活用して、デザイナーと企業による70以上のプロジェクトが展示されました。数多くの作品の中でも心に残った展示をいくつか紹介します。

香水ブランドLes eaux primordialesのインスタレーション。

フランスの香水ブランドLes eaux primordialesのためにミラノを拠点に活動するDWA design studioが制作した精巧なインスタレーション「Expériences Immobiles」は、化学実験室で使われるフラスコへ、香水の素となる固形の原料や希釈される前の液体を封じ込め、日常では感じることのできないその強烈な匂いを来場者に体験させるという趣向です。フラスコから思いがけない香りが飛び出し、来場者たちがしばしたたずむ光景が見られました。無骨な躯体をバックに、木材の華奢なフレームの中でライトアップされたガラスがジュエリーのように輝いていました。この作品は、フォーリサローネ・アワードのインタラクション特別賞を受賞しています。この地区の再開発ARIA EXMACELLOプロジェクトは、この産業遺産の芸術的価値を後世まで残す為に、取り壊される前に建具や鍵、建築装飾、照明器具などを取集し、それらを種類ごとにまとめ写真と併せて実物を展示しました。その数の多さ、巧みなつくり、機能美などから、建設当時の緩やかな時間の流

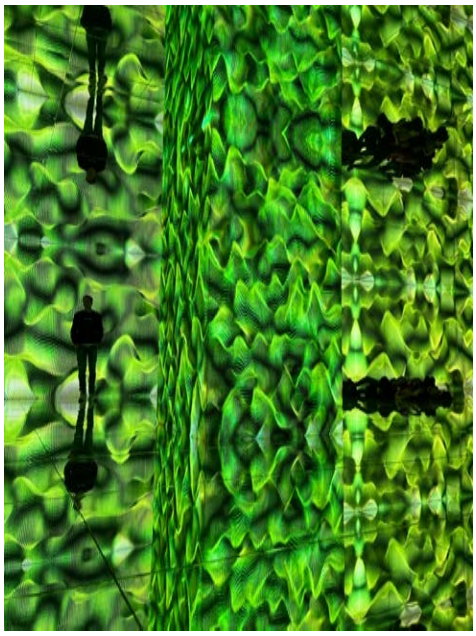
イベントを開催している産業遺産からARIA EXMACELLOが収集したさまざまなパーツ。

れとものづくりへの熱意が感じられました。「TOUCH WOOD」と題された日本人クリエーターの二人展に出会いました。オランダのアイントホーフェンを拠点とする太田翔は、彫刻的な方法で家具を作り出す試み「surfaced」プロジェクトを展示。東京を拠点にする狩野佑真は、小径木や枝葉、樹皮、実、その森の土など樹木にまつわる様々な物を、完全水性アクリル樹脂と混ぜ合わせ、それらを削り出して製作する新たなマテリアル「ForestBank」による作品。自然光が射し込む飾りも人工照明も全くない空間に、異なるアプローチにより、木という素材を使い切り、その個性を生かした力強い作品たちが展示されていました。メキシコシティを拠点にするデザインスタジオDavidpompaは、照明器具Ambra Tobaを紹介するStone Archiveインスタレーションを展示。その扱いやすさと入手の容易さにより、古代よりメキシコ文化の発展と深く関わりを持ち、国のアイデンティティを担う、火山帯から広く産出される凝灰石TOBAを生かすために考案された照明シリーズです。

instagram.com/shoo_ohta

TOUCH WOODの力強い作品たち。

ALCOVAを後にし、街中に点在するイベントを見て回る中で、一番刺激を受けたのは、韓国の自動車メーカーKIAの迫力のあるメディアアートです。Museo della Permanenteの中で行われたこのイベントは、企業哲学のコンセプトである「Opposites United」をメインテーマに、Technology for Life、Bold for Nature、Power to Progressなど5つのサブテーマに沿ったメディアアートを、テーマごとにそれぞれの空間の中で映し出しました。壁面や床を覆う鏡の効果を余すところなく活用し、刻々と映し出される動画に併せて環境を変幻自在に変えていくという、非常にダイナミックで刺激に満ち溢れた体験の場でした。フォーリサローネ・アワードのテクノロジー特別賞を受賞しています。



KIAのメディアアートOpposites United。

もう一つ、有名ブランドのイベントの中でも、Louis Vuittonの「OBJETS NOMADES」はとても見応えのあるインスタレーションを見せてくれました。ネオクラシック様式のSerbelloni宮殿の中庭に出現した、オーガニックなフォルムのシェル構造体は、コンピューター計算により曲面を持つ立体的な構造を研究する建築家MARC FORNESのこれまでの研究成果を集約した「NOMADIC PAVILION」です。それぞれの半球体は直径もメタルの厚さも異なり、合計で700以上のパーツを組み合わせてできています。中に入ると、細胞を思わせる有機的な形態が交差し、メタルパーツの繋ぎ目が作り出す穴から陽光が射し込み、柔らかな光が感じられます。設計から施工までを詳細に説明した展示パネルが掲示されていましたが、そこから読みとれたことは、相当の時間と贅を尽くした作品だということです。

Louis Vuittonのインスタレーション Nomadic Pavilion。

最後に、DIMORESTUDIOがブレラ地区のギャラリーとは別に、昨年ミラノ中央駅近くにオープンした新拠点で繰り広げた、異色なインスタレーション「Silence」を紹介します。このデザインスタジオは、元Cappellini社アートディレクターEmiliano Salciと元グラフィックデザイナーBritt Moranが、「記憶を解釈し、夢を作り出すこと」をコンセプトに2003年に創立したデザインスタジオです。彼らは、独特でパーソナルな感性とビジョンを通して、ヴィンテージの家具や現代アートを選び抜き、それらをインテリアデザインに反映させ、五感を刺激するストーリーをつくり出します。今回のイベントのために制作したインスタレーションは「1950年代のシカゴの診療所の待合室」、「ハンブルグのコレクターの隠れ家」、「ペンシルバニアの風の部屋」といった5つのタイトルでインテリアデザインが創作され、幻想的な物語を語ります。低いボリュームでBGMが流れ、芳しい香りが漂う中で、来場者はまるで盗み見るかのように、意図的に壊された壁の穴からインテリアを眺めます。一つ一つの空間へ年代も作者も異なる家具、照明器具、絵画、彫刻などを彼ら独自の感性で組み合わせ、まるでデカダンスとも言える形容し難い魅力に引き込み、そこに誰かがいる気配をも感じさせる不思議な空気感を創り出していました。

DIMORESTUDIOのインスタレーション Silenceの一つ、１９５０年代のシカゴの診療所待合室。

今年は例年以上に、ミラノならではの最高のロケーションの中で開催された数々のイベントが、究極の美しさや、ポジティブで刺激的なもの、そして未来への暗示を充分すぎるほどたっぷりと披露してくれました。

来年のデザインウィークの開催期間は、2024年4月16日から21日です。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー
武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒
Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住 個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わったのち
2005年より クリエイティブ・コンサルティング会社（デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン、アプリ) の共同経営者として活動

デザイン・アートに関するプロジェクトコーディネイト、翻訳および通訳
mikeda.it